

インターネットでつながる親たち

ガスケル雅代

グリーンビル日本語補習校

masayogaskell@yahoo.co.jp

<要約>

インターネットの普及により、情報は居ながらにして簡単に手に入るようになった。共通の興味により様々なネットワークがあるが、そのひとつに「子育て」がある。子育てのHPはたくさんあり、その掲示板に子育てについての悩みを書き込むと、それを見た人たちからすぐに助言をもらえて、外出する必要もない。

国際結婚の増加や海外在住の日本人の増加とともに、子育てについて相談する人がそばにいない親たちがインターネットを利用している。子育てHPの中にはバイリンガル教育のコンセプトを持っているものも多く、継承語としての子どもの日本語教育に悩む親たちがネットにつながっている。本稿は代表的なウェブを紹介し、さらに親達の悩みを分析検討したものである。

1. はじめに

ここ数年でインターネットはめざましく普及した。昨今では、電子メールや情報検索など、ビジネスのみでなく一般家庭でも利用されるようになった。インターネットの利点は次のような特徴がある。

- 1) 外出しなくても家で情報収集可能であること
- 2) 経験者や仲間と交信可能であること

一方、子育て中の親達は次のような不満や不安をかかえている。

- A) 相談する人がそばにいない
- B) (相談する人がいても) 小さな子がいてなかなか外出できない

1) はB) を、2) はA) を一挙に解決するのである。一般の親達がこのことに気づくまでに長い時間はかからなかった。

2. 子育てHP

インターネットの「家に居ながらにして他人と交信できる」特徴は、新しい仲間作りの形態を可能にした。遠距離でもかまわず、顔を知らない相手でもかまわない。興味が同じことでつながる仲間である。親達のネットワークはそのうちのひとつであり、つながっている興味の対象は「子育て」である。

核家族制度により子育て中の親のまわりには、経験談を話してくれたり相談にのってくれたりする人がいなくなった。また、日本の企業の海外進出や国際結婚の増加により外国などの特殊な環境で子育てをしながら孤独感をつのらせていくものも多かった。そこへインターネットの出現である。子育ての情報を発信する人が出てくると、そこへアクセスしてくる人も出てきて、親達の子育てネットワークが次第にできあがっていった。今では様々な子育てのホームページが誕生しリンクをはっている。ためしに Google の検索で「子育てHP」といれてみると 163,000 件も出てくる 1)。子育ての毎日を綴った簡単な日記だけのものもあれば、バイリンガル教育情報満載の詳しいものまで多彩である。

3. 世界子育てネット Sweet Heart

子育てHPで最大のものは「世界子育てネット Sweet Heart」であろう。二人の主婦が作った「親達のネットワーク」である。二人のうちの一人が当初から米国に住んでいたため、日本と米国をつなぐ子育てネットとして 1991 年に小さな 24 ページの冊子でスタートしたが、新聞記事などでとりあげてもらえることが唯一の仲間集めの手段だったという。だが、やがてインターネット時代が到来する。インターネットという新しい手段により、仲間は飛躍的に広がっていった 2)。

Sweet Heart を考察の題材とし、次の 3 点について調べてみた。

- 1) 一日のアクセス数
- 2) 国別アクセス数
- 3) アクセス者

3-1. 一日のアクセス数

Sweet Heart への一日の平均アクセス数は表1のように4,500件であった3)。あるインターネット広告会社が『当サイトの一日平均アクセス数は3,500~4,000です。』と宣伝していることから見ると、かなりの数であることがわかる。

年月日	アクセス数
3-3-04	4,933
3-4-04	5,130
3-5-04	4,593
3-6-04	4,134
3-7-04	4,672
3-8-04	5,579

表1 SHアクセス数

3-2. 国別アクセス数

国別に多い順に見てみると表2のようになった4)。日本からのアクセス数が最も多いのはこのホームページが日本語で書かれているからであろう。また、日本とアメリカからのアクセス数が特に多いのは小冊子でスタートした時から両国でのネットワークをめざしていたからだと思われるが、その他の欧州、アジア、オセアニアなど国々からもアクセスがあり、「世界子育てネット」の名の通りリアルタイムでつながる親達のグローバルなネットワークであることがわかる。世界のいたるところの国々で子育てしている日本人がいるのである。

海外在住の日本人にとって、インターネットの出現により日本語での情報は以前よりずっと早く容易に手に入るようになった。また近年海外からも日本語での交信が可能になったことが、海外で同じような環境で子育てしている親同士（たとえば北米在住者同士）が日本語で意見を交換できることを可能にしたのである。Sweet Heart HPで最もアクセスの多いページは掲示板だそうだ。特に

順位	国名
1	日本
2	アメリカ
3	カナダ
4	オーストラリア
5	シンガポール
6	イギリス
7	ドイツ
8	ニュージーランド
9	フランス
10	スイス
11	オランダ
12	イタリア
13	ベルギー
14	香港
15	オーストリア
16	マレーシア

表2 SH国別アクセス数

海外で子育てしている親達に人気があるという。「北米では・・・」などの地域を考慮した助言なども多かった。

子育てに悩む人が質問を投げかけ、その数時間後には経験者などから応答があり、そのあとも次々に助言を書き込む人がいる。世界の国々では時差があるから、誰かがどこかでつねに見ている可能性があり、そのスピードとネットワークの広がりには驚嘆する。子育てに悩む親にとっては、たくさんの相談者が世界中にいることになるわけである。

3-3. アクセス者

Sweet Heart のHPアクセス者の99.9%は母親である。他の子育てHPを見ても母親が圧倒的に多い。これは冒頭で述べた「外出しにくい」親が父親より母親であること、また「子育てに関する話題でつながっている」のが父親より母親であることを示している。特に子育てHPは母親の役目が非常に大きい乳幼児期の子育て情報から出発したものが多いため、後で述べるように中学生以上についての情報が少ない。乳幼児の子育てにおいては母親と子供の密着度が強いため、母親が子供の昼寝の時間などにインターネットで交信を楽しんでいるというケースが多い。

また、上述の Sweet Heart の掲示板は全部で15あるが、その中で子供の言語に関する悩みが多いのが「バイリンガル情報掲示板」「小学生以上の子育て掲示板」「Q&A専用掲示板」の3つの掲示板であることから、どんな親が書き込みをしているか調べた。調査対象は2004年2月分およびその調査日までに投稿のあった3月分で、方法は各書き込みの文中の自己紹介的な部分からひろった。そのため、不明のものは加えていない。結果はほとんどが子供にバイリンガル教育をしている親達であった。これをさらに次のように分類した。

<海外在住者>

- 1) 駐在など海外に短期在住者
- 2) 国際結婚で海外に在住者
- 3) 海外に永住者

<日本在住者>

- 4) 国際結婚で日本に在住者
- 5) 日本在住で海外在住経験者（バイリンガル教育しているものも含む）
- 6) 親である本人が帰国子女
- 7) 両親が日本人の家庭で海外経験もないがバイリンガル教育をしている親

4. 親たちの悩み

4-1. 言語に関する悩み

では、これらの親達が子供のことばについて具体的にどんな悩みをもっているのだろうか。「3-3.」で調査をした Sweet Heart の3つの掲示板から子供の言語に関する悩みについての1,077件を表3のように分類した。

悩み・質問	1,077 件中の割合
英語学校	30.5%
英語教材	23.8%
日本語教育	15.9%
言語環境	5.5%
バイリンガル教育	4.9%
言語障害	3.0%
海外の現地校	3.0%
日本の学校	2.4%
その他	11.0%

表3 SHの3掲示板における言語に関する悩み

Sweet Heart HPでの親の悩みはSH全体の約50%強が英語の悩み、とくにインターナショナルスクールに関する質問が多かった。3-3で分類した4)、5)、7)の「日本在住で英語教育に力を入れている親」たちの興味が、近年インターナショナルスクールに集中しているためである。一方、日本語の悩みは、「日本語教育」「言語環境」「バイリンガル教育」「言語障害」「日本の学校」の各項目すべてに関連しており、34.7%となった。特に海外在住の継承日本語学習者についてのものが多かった。日本在住の親は子供の英語について、海外在住の親は日本語についての関心が高いことを示すものである。「その他」は英語と日本語以

外の言語に関するもので、日本語と英語以外の言語のバイリンガルまたはマルチリンガルの子供についてのものだった。

4-2. 日本語に関する悩み

これらの日本語に関する悩みを分類すると、次の3項目になる。

1. 言語環境に関する悩み
2. 言語発達に関する悩み
3. 教え方や教材の悩み

このうち「1」と「2」には幼児期の悩みが多かったが「3」は学齢期の悩みであった。親の悩みは子供の成長とともに変化していくことがわかる。それでは、具体的にどんな悩みが多いのであろうか。考察しながら以下で詳しく説明する。

1. 言語環境に関する悩み

- ①二言語一度に教えて大丈夫？
- ②セラピストから一言語にするようにいわれましたが
- ③一言語から二言語環境に変えるのは
- ④ひとり一言語とはいいますが
- ⑤補習校に行かせるべきでしょうか

①は子供が生まれ、言語環境をモノリンガルにするか、バイリンガル（またはマルチリンガル、以下同様）にするかの親の悩みである。やがて、バイリンガル環境で始めてみたものの子供はことばがうまく発達していると思えない。たいてい子供が3～4歳前後で悩み、スピーチセラピストなどに相談すると一言語にした方がよいと言われる。海外在住の場合、スピーチセラピストはバイリンガルの専門でないことが多いから、②の疑問となる。セラピストの言うとおり日本語をあきらめ現地語のみの環境にしたが、数年たつと問題がなくなり再び日本語も加えた環境にしたいという場合もある。③はこのケースであるが、これに類似した質問で、海外駐在の親が子供の言語環境に関して悩むケースも目立った。

バイリンガル家庭の場合、「ひとり一言語」の鉄則は周知となってきたが、実生活の中でとまどう親も多い。特に子供が公園で遊んだりする年齢になり、外の社会とだんだん触れ合いはじめると、親子のほかに第三者が会話の中に入り始める。この時期の親は誰もが④の疑問を一度は持ち、自分なりに対処しているようである。やがて入学年齢が近づくと⑤の質問が出ることが多い。

2. 言語発達に関する悩み

- ①言葉が遅いのですが
- ②障害があると診断されましたが
- ③どもるのですが

バイリンガル児の言語発達はモノリンガル児に比較して遅いように見えることが多い。多くの親が必ずといってよいほど①に悩む。実際に障害によることもある。②の質問は同じ経験を持った親へ発信したもので励ましや助言が返されることが多い。言葉が正常に発達した子供でも親が③の悩みを持つこともあるが、バイリンガル家庭の場合にはその原因を特殊な言語環境にあると親が考えがちなので「うちもそうでした。でも、大丈夫。」の経験者からの一言で胸をなでおろす親も多い。

3. 教え方や教材の悩み

- ①日本語の「青」はどう教える？
- ②教科書が手に入らないのですが
- ③家庭での日本語学習の教材は？
- ④九九は日本語で？
- ⑤日本語学習にやる気をださせるには？
- ⑥補習校を続けるべきか

実際に親が家庭で日本語指導を始めると今まで疑問に思わなかった日本語のこ とばの不思議に気づくことがある。①はその一例であるが、英語では green というところを日本語では「青」と言ったりするので、このような質問が出てくるので

ある。②と③は教材についての悩みである。特に海外在住者の継承日本語学習者向けの教材についてのことが多い。

小学2年生になると日本の義務教育で九九を学習するが、バイリンガル児も日本語でおぼえた方がよいのかというのが、④の質問である。やがて、親と子の日本語学習は子供の自我の成長とともに、むずかしくなってくる。子供の成長と共に子供の活動範囲は社会に広がっていき、親子関係も変化し始めてきて、日本語学習にも影響してくる。⑤、⑥はそんな時親が抱える悩みである。

4-3. 悩み分析からわかったこと

親の悩みを分析した結果、子供の成長過程のある時期にその子の親が持つ悩みは同じであることがわかった。例えば、バイリンガル環境で子育てしている親は子供が3～4歳になったとき、「うちの子は言葉が遅いのではないか（2-①）」と不安になるものなのである。ただし、小学生以上になると子育てHPの数は減少していき、中学生以上の情報はほとんどないため、調査は幼児期と小学生の年齢に限られた。

また、親は話を聞いてくれる人がいる場があるというだけで、満足感を得ているようである。なぜなら、書き込みをした後、読む人のヒット数が多くても返信も多いとは限らないから、求める回答がいつも必ず得られるというわけではないのである。親は専門家ではなく、経験からアドバイスをするだけであるから、すべての悩みに回答できるわけではない。

5. 今後望まれる情報

以上親達が子育ての不安や負担感・孤立感を、インターネットを通じて同じ悩みを持った親や先輩の親達からのアドバイスを受け、安心感を得ていることがわかった。インターネットのスピード性、広域性はほかに類を見ないアドバイザーである。しかし、それだけでは井戸端会議的なもので終わってしまうのではないだろうか。そこで最後に、今後の親達のネットワークのあり方について次のような情報を提言したい。

1) 親からの情報の充実

親の悩みは子供の成長とともに変化する。せっかくHPを作っても主催者が自分の経験の変化から子育てHPを閉じてしまうことも多い。ところが、たとえばバイリンガル環境で育っている3才の子供をもつ親の悩みは同じものであるため、繰り返し同じ質問がでてくるのである。したがってこのような情報をまとめたウェブが望まれる。また、親のネットワークでは幼児期の子育てについては多くの情報が得られるが、小学生以上となると少なくなり、とくに中学生以上については、ほとんどない。親離れの進む難しい時期であるので「親の悩み」はあるのだろうが、人と分かち合うものではなくなるのであろう。「子育て」という語感とは距離が出てくるので、子育てではない別の共通項を通じての仲間ネットワークができていくこともある。しかし、海外在住の親達にはより多くの情報が必要であり、特に継承語学習者の親達には言語習得における臨界期は過ぎてしまった中学生以上に関しても、その親からの情報が待ち望まれている。

2) 教材情報

それぞれのHPや掲示板の中に具体的な教材について触れてあるものはまだ数少ないが、良質のものがある。家庭学習で使えるアイデアをまとめたサイトなど、情報を広めるものが必要であろう。また、特に継承日本語学習の教材研究・開発が早急に望まれる。

3) 能力テストや目標設定のめやすとなる情報

親の悩みは子供の成長発達と親の望みが一致しない場合におこることが多い。特に継承日本語学習者の場合、親の自分を基準とした理想と子供の日本語運用能力のギャップがあるため、子供の学習成果を見るための能力テストや目標設定の指針があるとよい。現在、CBIが子供の日本語能力テストとして存在するが、親自身が施行できるものが必要である。

4) 専門家とのネットワークのつながり

悩みを持つ親は、その悩みを共有してくれる人がいるだけで救われることも多いが、一般の親たちだけでは間違った方向へ行く危険性も否定できない。ネットワークの親の中に専門家がいる場合がベストであるが、医

師・教師・研究者などの専門家とのネットワークをつなぐことで、子供の心理・能力・生き方・アイデンティティ形成などについて親が知識を深め子供と接することができるような方向性が望ましい。

特に、継承語日本語学習は親によって指導されるわけであるから、研究・調査・分析結果、学習者の弱いところを補って効率よく日本語を覚えていく方法・教材などの情報が専門家から親に向けて発信されることが望まれる。親の実践から研究へのフィードバックはきっと役に立つであろう。

いつの時代も親は子供を育てなければならない。そして、親達の力は子供のためにプラスの力とならなければならないのである。親達とその周りの人々による、さらなるネットワークの拡大と充実を期待したい。

注

- 1) 2004年3月7日時点の調査によるもの。
- 2) ホーバン由美子さんの電子メール私信(3/09/04)から引用「・・・もともと Sweet Heart は小さな 24 ページの冊子として 1991 年にスタートしました。私が第一子を出産した年でした。私自信は留学でこちらに参りましたが、やがて結婚し、仕事を離れ、慣れた土地を離れて、育児の孤独を感じていました。そこで、同じような状況にある人とのコミュニケーションの場があれば、と強く思い、日本の友人とともに会報を始めました。そして、インターネット時代の到来。今までは、新聞などで取り上げてもらえることが、唯一の仲間集めの手段でしたが、インターネットの出現によりまさに水を得た魚のような気がしたものです。・・・」
- 3) Sweet Heart からのデータはグラフだったものを表にした。
- 4) Sweet Heart からのデータを表にした。

参考文献

- 世界子育てネット Sweet Heart (<http://www.sweetnet.com>)
My Treasure Chest (<http://page.freett.com/RAQAinter/>)
日英バイリンガル家庭の子育て記 (<http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Green/9267/>)
Google 検索 (<http://www.google.co.jp>)
子供と言葉 (<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/8625/2001.htm>)
- ダグラス昌子・片岡裕子・岸本俊子<国際教育評論 No.1, 2003> 「継承語校と日本語補習校における学習者の言語背景調査」
中島和子「バイリンガル教育の方法」 (1998 アルク)
中島和子<Obrin Synergy, No.1, 2003> 「継承日本語学習者の漢字習得と国語教科者」
中島和子「言葉と教育」 (海外子女教育財団 1998)
牧野成一他「ACTFUL-OPI 入門」 (2001 アルク)
村和子・金子智栄子・平山許江・アレン玉井光江<文京学院大学研究紀要 No.15>

「保育者養成大学における子育て支援のありかたについて」
目良秋子<Human Development Research, 2001, Vol.16> 「父親と母親の子育てによる人格発達」